

新左翼労働運動10年

□ 三菱長崎造船社研の闘争

三一書房

I

編者 〇 長崎社研代表 久保田達郎 〇 藤田若雄 〇 高梨 昌 〇 神林章夫 〇 竹川慎吾



新左翼労働運動10年

I

三菱長崎造船社研
藤田若雄ほか 著

三一書房

ある感傷を序にかえて

なぜか、その日の記録は残されていない。

薄暗い六畳の部屋に、一〇人があつまつたのは、たしか一九六〇年五月のある日であった。

共産党の場合と異なり、結成と加盟の決意書には「共産主義者として生涯を闘う」とみんな短くかいた——その一行に、お互いの万感の情がこめられていた。

当時、学生戦線とちがって、労働戦線での新たな闘いは、まだ星雲状態の域を出ていなかった。

三菱長崎造船船一萬二千の中の一〇人であることにためらいはなかったが、日本中のどこにも相談相手のいない心細さは、ときとして耐えがたい不安をもたらした。まして、すでにソ連をはじめ自称「社会主義国」に裏切りの屍臭をかいでしまった私たちにとって、全世界への挑戦は、気も遠くなるような無力感と怯懦をしばしば伴った。

しかし、資本との闘いに日々をさらしている労働者にとって、進むか退くか、所詮「静止」は許されなかった。私たちは心にきめた。

——既成の処方箋がない以上、すべては自己をかけた試み以外にない。失敗を恐れて無にとどまるよりは、かりに血反吐にそまつた残骸をさらそうとも、その歩みのすべてを通して、労働者はいかに闘い、いかに闘ってはならないかを、示しうるような、そうした生涯を貫こうではないか、と。

議論は根本からやり直され、その信念は大胆に行動に移された。

「賃金制度廃止のための春闘って、どうやるんだ」——激論の末、単産の全国大会に晴れてのりこんだある仲間は、「賃金制度の廃止」を動議として提出した。この動議は賛成提案者のみで否決された上、「カネがなくなってしまうとして食

っていきけるんだ」と集中攻撃をあげ、その仲間は太いにくやしがったものである。

緊張した日々を生きぬくために、ある仲間は酒を断ち、他の仲間は五カ月の胎児と離別した。

だが、不思議に私たちはよく笑った。

逃げ場のない逆境においつめられたときでも、銜いのない、あけすけな仲間の発言に笑いこらげたものである。レーニンの言葉にいささか反する、この日頃の笑いは、あるいは私たちにとって唯一の、「日和見」的憩いの場であったのかも知れない。

かくて一〇年がすぎた。

その一〇年の歩みの一部が、ここに数冊の「記録」としてまとめられることとなった。

よみ返してみても、どの原稿を誰がかいたかもさだかでなくなつたが、ざっと三〇人ほどの手によるものであることはまちがいない。なかには、演説はうまいのだが書くのは無類の苦手という仲間もある。組合事務所の一隅で、演説口調で喋るのを他の仲間が筆記し、それをよみあげてもらって更にあちこちを口述で訂正させ、苦心惨憺してでき上がったビラである。

だが、いまこの「記録」を前にして、何よりも私たちは、七〇年の今日こうした「記録」が発刊される事態そのものに、深く恥じねばならない。六〇年の苦汁の中で誓った「七〇年」を省みると、私たちはきびしく怠惰を責められねばならないのである。

とはいえ、六〇年一月一六日、安保改定岸渡米阻止Ⅱ羽田空港実力占拠の闘いに全国から結集した全学連が七百余、労働者は私を含めた若干名であったのにくらべれば、六九年一月一六、七日の蒲田で、数千から万余に及ぶ労働者、学生が「武装」の政治をわがものとして闘いぬいた事実、やはり巨大な前進であった。

改めてこの「記録」をよみ返すとき、なつかしさよりも、穴があったら入りたい思いが先に立ってしまうが、しかし、粉飾されざる自己の過去と対決することは、今後の私たちにとっても決して無駄にはなるまいと思う。

日本帝國主義の新たな衝動にこたえて、七二年に向う日本労働運動の再編過程はますます急ピッチである。労働運動の再編とは、労働組合組織の新たな分裂・解体・変質・統合の全過程として、表現される。この自明にして冷徹な事実から、闘う労働者は決して目をそらせてはならない。

反戦青年委の闘いは、さらに自己の労働組合運動を生み出すことによって、本格的に七〇年代の要請にこたえることができるだろう。

陣痛の苦しみは、しかし、新たな生命への飛躍でもある。われわれは、それをやりぬかねばならない。

私たち長船社研は、文字通り、三菱百年の圧制の下に闘い続けてきた長崎造船労働者によって生み落され、その一部として育てられてきた。その長船労働運動はいま、きびしい分裂の下でさらに三名の反戦青年労働者（一〇・二一逮捕）への首切り攻撃という、史上最大の試練に直面している。だが、不滅の労働者魂は、もっとも困難なときにこそ、輝きをまですものである。長船労働者は、目先の一時的利益のために労働者階級の根本的原則を売り渡すことを固く拒否するだろう。いかなる犠牲と孤立にも屈せず、その試練に耐えぬくだろう。私たち社研はその忠実な、最良の息子とならねばならない。

さいごに、私たちはこの一〇年間に、かけがえのない二人の同志を事故で失った。いずれも私と同じ第一鑄造工場に所属し、藤崎克博君は六三年一月、当時二二歳、鍵山秀樹君は六九年七月、当時二九歳であった。今日、六八年一月の佐世保エンタープライズ闘争さえも経験していない、若い新しい同志も組織の戦列に加わって、未曾有の試練と飛躍を目前にしているとき、社研創成期を共に闘いぬいた不撓不屈な両同志の不在は、この上もない痛恨事である。

この「記録」は何よりもまず亡き両同志に捧げられる。そして、もし許されるならば、この間組織の戦列を離れたとはいえ、いままなお労働者の魂を失っていない、かつてのすべての同志にも届けられるだろう。彼らの闘いなしに「社研の一〇年」はありえなかったからである。

なお、この「記録」は、東京大学社会科学研究所各位の大変なご苦勞と三一書房のご好意なしには、とても存在し得な

かった。心から感謝したい。

一九七〇年五月

三菱長崎造船社会主義研究会

代表 久保田達郎

本書が刊行されるようになった事情をかきとめて、まえがきにかえよう。

一九六九年八月上旬、われわれは、三菱長崎造船所の第一組合をおとずれた。それは、組合分裂下の労働争議はどんな状態で行なわれるかを調査するためであった。その際、そこに「社研」（社会主義研究会の略称）とか「トロ」と呼ばれる一グループがあり、極めて特異な運動を行なっていることを知った。

極めて短期間の滞在ではあったが、われわれは、このグループの人々から、その運動の内容について多くのことをきかせてもらった。そして次第に明らかになったのは、わが国の「年功的労使関係」の下における組織原理——「丸がかえ」——を破り、自律的集団に育つ方向が、このグループのいろいろの行動に打ち出されていることであった。われわれは、「丸がかえ」的組織原理から個人々々の決意による自律集団原理への組織原則の転換こそが、一九六四年を転機として進行している「七〇年代労働運動」の基底となると考え、ひそかにそのような運動の体現集団をさがしていた。それ故に、この一グループとの出あいは、われわれにとって、まことに心躍るものであった。

われわれは、この感激を行動に移した。これが本書の刊行である。われわれは、日本の労働者の一人でも多くが、このグループの運動を知ること并希望する。そこで、われわれは、このグループのビラを整理し、資料をしてこの組織の行動の軌跡を語らしめる方法をとった。

なお、ここに収めた資料は、三菱長崎造船社会主義研究会（長船社研）が一九六〇年以降に発行した機関誌（「社研」）、ビラ（「社研号外」）、資料等をはじめ、組合、会社、諸政党の発行物など「長船社研」所蔵のものを中心にしてその一部を編集したもので、ほとんど原文のまま再録した。ただし、一部、誤字・脱字の補正、体裁の変更を加えた箇所があるが、必要最小限度にとどめ、原文に忠実であ

るように努めた。

これらの資料は、東京大学社会科学研究所内「労働争議研究会」（研究会代表・藤田若雄）の実態調査の一環として一九六九年八月に行なった「全造船機械三菱長崎造船分会」の調査に付帯して収集したものである。このドキュメントの編集に当っては、主として労働組合運動に関するものに限定し、「革命綱領」や「党建設」の基礎理論に関するもの（たとえば、ソ連論、中国革命論など）は割愛した。編集に当っては、「長船社研」発行の諸資料についての社会的背景を明らかにし、かつ読者の理解を容易にするために、関係資料をも必要に応じて挿入した。たとえば、全造船機械三菱長崎造船分会の機関紙（「週刊しんすい」「しんすい速報」、同分会青年婦人協議会の機関紙（「芽だち」、長船刷新同志会の機関紙（「刷新」、三菱造船株式会社史（「三菱重工業株式会社編、一九六七年刊」）および「資料労働運動史」（労働省編）などの諸資料から採すし、参考資料として添付した。

この資料の整理・編集は、労働争議研究会メンバーのうち実態調査に関係した四名が、資料選択と配列を行なった上、「長船社研」の意見を求めて若干の補正を行なうという手続きを経て完成した。ここに収録した資料の表示方法は、以下の通りである。

(イ) 各資料の見出しは、そのまま転載した。

(ロ) 各資料の発行者名、発行年月日は、原則として各資料の見出しの次に表示した。

なお、資料の中に、多くの略記された部分がある。そのうち主要なものの正称は、つぎの通りである。

中間——平時は全造船機械三菱重工支部中央執行委員会。分闘——平時は全造船機械三菱重工支部長崎造船分会執行委員会。拡闘——平時は長船分会委員会。（青）闘争——青婦協三役処分反対闘争。（専）闘争——組合専従役員首切反対闘争。（臨）闘争——臨時工常備切かえ闘争または臨時工首切反対闘争（一九六三年）。（勤）闘争——「勤怠取扱い要領」反対闘争。

一九七〇年五月

藤田 若雄
高梨 昌
神林 章夫
竹川 慎吾

目次

ある感傷を序にかえて i
編集にあたって v

序章 日共長船細胞よりの集団離党 三

党員が集団離党を表明、日共三菱長船細胞、本部と意見食い違ひ 三

長崎造船社会主義研究会の歴史と活動(一) 三

日本共産党三菱長崎造船細胞・集団離党までのメモ 二六

第1章 社研の発足 七

長崎造船社会主義研究会の歴史と活動(二) 七

I 学習会活動 三

II 政治的中核組織の形成 五

III 政治組織としての活動 五

- (1) 三池闘争(一九六〇年) 五
- (2) 政暴法反対闘争(一九六一年) 六
- (3) 大正炭鉱闘争(一九六〇～六二年) 六
- (4) 「社研」創刊(一九六一年) 六

viii

- (5) 米ソ核実験反対闘争(一九六一、二年) 一〇一

第2章 長船分会と社研 二三

長崎造船社会主義研究会の歴史と活動(三) 二三

I 分会執行部批判と「市民権」の確保 二七

- (1) スパイ挑発者よばわりに対する闘争 二七
- (2) 執行部批判の権利 三三
- (3) 大会代議員選挙(菱労、全造船) 一四
- (4) 分会執行委員選挙(一九六〇、六一年) 一五

II 労働組合活動と社研 二六

- (1) 労働協約闘争と民主化闘争(一九六一、六二年) 二六
 - (i) 協約闘争 一六
 - (ii) 新従業員制度との闘い 一七
- (2) 青婦協三役処分反対闘争(一九六二年) 二四
 - (i) 死亡災害抗議 一五
 - (ii) 青婦協三役処分 一六
 - (iii) スト権確立へ 一六
- (3) 残業規制に対する闘争 三〇
- (4) 臨時工首切り反対闘争(一九六一～六三年) 三九
 - (i) スト権確立 二四
 - (ii) 三区分問題をめぐって 二五

(iii)	重点スト、定時攻撃	二五九
(iv)	収拾へ	二六六
(v)	“敗北”	二七六
(vi)	総括をめぐって	二八一
(5)	春闘（一九六一～六三年）	二八四
(i)	一九六一、六二年春闘	二八八
(ii)	一九六三年春闘	二九四
(iii)	職場のつきあげ	三〇〇
(iv)	中闘独走、分闘否決	三〇六
III	三重工合併への布石	三一
(1)	勤怠要領の攻撃（一九六三年）	三一
(2)	三重工合併と一九六三年菱労大会	三三
(i)	大会代議員選挙	三三
(ii)	菱労大会	三三
(3)	分会執行委員選挙	三六
	追補資料	三七〇

新左翼労働運動10年

II

三菱長崎造船社研の闘争

三一書房

編者 久保田達郎 藤田若雄 高梨 昌 神林章夫 竹川慎吾

新左翼労働運動10年 II

三菱長崎造船社研の闘争

三菱長崎造船社研
藤田若雄ほか
著

三一書房

目次

i	目次
序章	三重工合併と労働者階級 三
第1章	一九六四年春闘 四
Ⅰ	二社協調路線 四
(1)	新三菱、三菱重の動向 四
(2)	三菱日重横浜造船への訴え 五
Ⅱ	四・一七「ゼネスト」をめぐる 七
Ⅲ	中闘独走から妥結へ 九
(1)	二社脱落 九
(2)	中闘独走 九
(3)	中闘挫折 一〇〇
Ⅳ	三菱臨時大会、春闘総括 一二六
第2章	横断組織の結集 三七
Ⅰ	三重工の組合を強くする会 三七
(1)	活動へのアピール 三七

ii

(2)	協力者会議の活動 一四〇
(3)	組合を強くする会結成 一五〇
Ⅱ	全国造船社研の結成 一五五
第3章	原潜寄港阻止闘争 一五三
Ⅰ	原潜寄港阻止闘争の前進のために 一五三
Ⅱ	第一次、第二次原潜阻止闘争 一五八
第4章	三菱大会、組合役員選挙 一六四
Ⅰ	三菱大会 一六四
Ⅱ	分会執行委員選挙 一六六
Ⅲ	分会書記長選挙 一六六
第5章	一九六五年春闘 一七三
Ⅰ	中央委員選挙 一七三
Ⅱ	四労組協調路線 一七五
Ⅲ	賃上げを本給調整にふりむける会社回答をめぐる 一七九
Ⅳ	春闘総括 一八〇
第6章	新たな試練をもとめて 一八三
Ⅰ	闘いのなかでの理論学習 一八三
Ⅱ	社会主義労働者戦線の結成と参議院選 一八五

第7章 反合理化闘争 三三

- I 全面的合理化攻撃への対決 三三
- II 職場闘争の展開と分会方針 三三
- III 合理化具体案提示、スト権確立へ 三三

第8章 菱労大会、企業連結成を否決 三六

- I 菱労、全造船大会代議員選 三六
- II 菱労大会、四労組合併拒否へ 三六
- III 分会執行委員選挙 三六

第9章 組合分裂との闘い——その序章—— 三六

- I 組合分裂の胎動 三六
- II 日韓闘争と年末一時金闘争 三六
- (1) 日韓闘争 三六
- (2) 年末一時金闘争 三六
- III 第二組合発生 三六
- IV 分裂下の闘い——配転反対闘争 三六

あとがき 三六

目次

あとがき

第I、II巻をよみ返してみ、改めて冷汗の出るおもいである。

まちがいやピント外れの数々、今日省みてどうにも政治的に不具合な文書など、なんとか削除できないものだろうか、とか、せめて他のドキュメントなみに資料の間に「解説」でもかき加えさせてもらえたら、等々とさまざまな思いにかられながらも、結局そのすべてに目をつむることにした。

「ウーン、スターリンの気持わかるネ」という仲間の冗談に思わず吹きだしながら、そうだ、ここが鉄鎖以外に失うものない労働者の、意地の貫きどころだと考えた。

帝国主義はもとより、スターリン主義との闘いなしに自己の前進も解放もありえない——そうした労働者にとって、公然たる歴史の偽造から「レーニン全集」の改ざんに至るスターリンの手口を、少しでもまねするわけにはいかなかったのである。

また、わずか一〇年の寿命さえ保ち得ない多くの文書に、われながらいささかうんざりもさせられた。ふりかえって「解説」することのたやすさにくらべ、歴史の歳月に耐え得る「主張」がいかに困難か。「革命家は、世界を解釈するのではなく、変革することである」——余りに有名なこの言葉の重みを、いまさらに思い知らされたのである。

しかし、ともあれ、これが正直な私たちの足跡である。長船社研は、西村・荒川両同志を別とすれば、他の全同志が中卒から三菱技術学校（養成工）を経た工員労働者によって構成されてきた。この記録は、そうした私たちが辿り続けた自分自身の顔である。いかにみにくだろうと、それを直視することなしに、私たちの明日はない。

読者各位のきびしい御批判を得て、さらに新たな地平に立ち向いたいと思う。

本書第一巻は、長船社研発足の一九六〇年から六三年までの発行文書を主として採録し、第二巻は三重工合併の一九六四年から、一九六五年くれの組合分裂前後までを中心に収載した。みられる通り、組合分裂との闘いは全体の理解をたずけるための予備的な採録にとどまった。

七〇年代労働運動を明白に予見せしめる三菱分裂の本格的究明と、その後の闘い——五年間にわたる長船分裂下の闘い、六七年三原製作所の闘い、六八年広島精機製作所の闘いなど三菱重工全域に及ぶ特微的攻防戦と六七年一〇月八日以来の反戦青年委の闘い——の記録については、追って第三巻以降に収録する予定でいる。



故藤崎克博同志



故鍵山秀樹同志

なお紙面の一隅をかりて、亡き藤崎、鍵山両同志の遺影を掲載するわがままをお許し願いたい。

一九七〇年八月

長崎造船社会主義研究会

代表 久保田達郎

(追記 日共、社民の野合勢力は、反戦派三君の首切りを承認した。そうした長船第一組合と訣別して、一九七〇年九月一日、私たちはあらたな少数派労働組合の旗をかかげた。)

左翼少数派労働運動

三一書房

第三組合の旗をかかげて

三菱長崎造船社会主義研究会 編

左翼少数派労働運動 第三組合の旗をかがけて

三菱長崎造船社研
社会主義研究会 著

三一書房

まえがき

二、三日前に閉会した総評第44回定期大会は、労働戦線統一問題について「四原則を具体化した七方針」を確認し、官公労参加問題も「ワンセット」とする態度を決定した。

ジャーナリズムは異句同音に、民間先行統一に歯止めがかけられたとして「左派の勝利」を報じている。だが、こうした虚像のむなしさを一番よく承知しているのは、恐らくはかならず「勝利した左派」の幹部たちかも知れない。総評大会がこの決議を採択したその翌日から、彼らは自己の保身のために、いかにしてスマートに大会決定を反古にできるかに心をくだいているに違いないからである。

この間一貫して既成左翼への幻想をすてて闘ってきた私たちには、その姿が手にとるように見える。初めのうちはなし崩し的に、やがてドラスチックに民同左派の自己崩壊が進行するだろう。宝樹氏による「七二年労働戦線統一」のタイムスイッチは、ほんの僅かのおくれをみせているとはいえ、確実にその秒針をきざんでいるのである。

一方、わが国の年間労働争議日数は、一九六七年の一八三万日から、六八年二八四万日、六九年三六三万日、七〇年三九一万日、七一年六〇三万日へとひたすら増加の途を示し、階級闘争はその深部からの地鳴りを次第に高めつつある。このような情況の推移に対する私たちなりの回答の、ひとつとして、私たちは一九七〇年九月一三日、三菱長崎造船における第三組合の結成にふみきったのであった。

丁度その頃、同じ三一書房から『新左翼労働運動10年』のⅠ・Ⅱ巻が刊行された。一九六〇年から六五年に至る私たちの活動の記録である。

2

1 まえがき

おもえば私たち「長船社研」の発足は、一二年前にさかのぼる。一九五八年の「エリコン（誘導弾）生産拒否闘争」を羊水とし、六〇年安保闘争のさなかに日本共産党三菱長崎造船細胞を集団離党した仲間たちが中心となった組織であった。そして、三菱独占の「獅子身中の虫」としての私たちは、真に革命的な労働者の道をめざして、失敗を恐れず敗北にくじけず、うむことなくその後の日々を生きぬいてきた。

本書は、そうした私たちの一九六六年から七二年七月までの足跡をまとめたものである。

したがって、内容的には『新左翼労働運動10年』Ⅰ・Ⅱ巻の統編をなすものといえよう。前書との関連を含めて若干の説明をつけ加えれば次の通りである。

(1) 『新左翼労働運動10年』が五年間の記録を二冊に収録したのに対し、本書は七分を一冊にまとめた。このため、資料の取捨選択には思いきって大なたをふるい、また個別闘争ごとの系統的な収録を放棄した。

(2) 一番残念だったのは、一九六五年くれの組合分裂についての総括文書をすべて割愛せざるをえなかった点である。改めて他の機会を得るまでは、『新左翼労働運動10年』Ⅱ巻の第九章と本書序章でお許しをいただきたい。

(3) 組合内部における反対派としての活動に関心のある読者は、主として『新左翼労働運動10年』のⅠ・Ⅱ巻にその多くの記録を見出されるだろう。

(4) 第三組合としての具体的な活動の内容をいまだ少し詳しくのせることができなかったのも、気がかりな点である。とくに政治闘争についてその感が深い。他日を期したい。

(5) 前書も同じことだが、収録した諸資料はいずれもその当時文書として残されていたものばかりである。事態を正確に理解していただくためには、単なる舌足らずの域をこえて、なお大きな不十分さ（場合によれば重大な欠陥）のあることは、この種記録文書には避けられぬ制約であろうか。

(6) 本書では、各章、節などの前後に於て必要最小限の説明を加えた箇所がある。むろんその旨明示してある。

(7) 本書所収各文章の執筆者については、純粹な個人的手記や座談会発言を除いてすべて署名を省略した。にもかくにも、私たち長船社研の責任に属するものと考えられるからである。

(四) 私たちが、七〇年九月の第三組合結成に先立ち、ある種のふんぎりをつけるため、内部討議用に作成した一つのパンフがある。

「帝国主義時代と労働組合の政治的分裂」と題されたこの小論は、ロシアの労働組合運動に対するレーニンの立場と一九一七年二月から一〇月に至る工場委員会役割り、世界労働組合運動におけるプロフィンテルンの位置づけとその後の人民戦線の歪曲を経て平和共存の戦後史までを概観するなかで、——企業内全員加盟組合たるわが国の実態をもふまえて——帝国主義の成立とその政治的帰結は、労働組合に対してもさ、いづの分裂の与件をつきつけるに至ったこと、即ち労働組合が自ら「過去・現在・未来」の全任務を遂行しようとするとき、その政治的分裂はさけられないし、したがってまた決してそれを恐れてはならない、といった問題意識をにつめたものであった。

この「内部討議資料」を知る先輩や知友からぜひ本書に収めるよう、強くすすめられたが、結局私たちはこれを見送ることにした。理由は次の三点につきる。何分のご了解を得たいと思う。(イ) 約一三〇枚余のぼる分量からみて、とくに本書の性格を考えると、他の闘いの記録を削減せざるをえなくなることが忍びなかった。(ロ) いわゆる「第三組合」的な労働組合の登場は、今日すでに運動過程に入っている課題である。とくに一九七一年の日本カーバイト労働組合の結成は労働者らしいおおらかな根性と大衆的現実性をもってなしとげられた。赤色労働組合主義についての見当外れで騒々しいお喋りと、それは全く無縁な地点で実現されたように、私たちには思われた。日カバの仲間たちにとって、すくなくともこの小論が不要だったことは疑いない。(ハ) むろん、私たちがとりくんだ課題が全く無意味であったというつもりはない。いや、その究明は——年配の運動家にはとくに——むしろ緊急の必要事であるだろう。だが、そうした理論作業は、一九七〇年以降刊行にめぐまれたおびただしい歴史的資料を含めて、改めて適任者の手にゆだねられることを期待すべきだろう。私たちがぐぐりぬけるためにのみ必要であった、粗雑で乱暴なこの小論は、すでにその生命を終っているのである。

う まえがき

さいごに、一つの職場を舞台にした一つの労働者グループの、一二年にわたるあからさまな活動の足跡が、こうして三

冊の書として刊行されるような事例は、多分珍しいことであろう。これはひとえに三一書房のご配慮によるものである。心から感謝するとともに、これを機会に全国の職場で苦闘する仲間たちの率直なご批判と討論を期待したいと思う。

一九七二年八月

長崎造船社会主義研究会
代表 久保田達郎

(追記) 七〇年代の労働運動は、わが国労働者が経験したことのない死闘の日々を、ついに職場に招きよせた。七二年一〇月二五日程、三菱独占は突如として長崎造船第三組合公然組合員三五名に対し、四日間ロックアウトを通告してきた。たちまち激しい攻防戦が全職場をまきこんだ。数百名の保安係に加えて約一千名の防衛隊が会社の手で組織され、厳重な検問体制がしかれたが、われわれを閉めだすことはできなかった。不意打ちをくった一日目こそ、入構・就労を実力でかちとったものは三名にすぎなかったが、二日目九名、三日目一四名、四日目には全員へと前進した。入構を阻止されたものは負傷者とともに門前に坐りこみ、逆に三菱の全門を封鎖して輸送業務に甚大な打撃を与えた。

組合の断固たる反撃にいらだった会社は、一月一五日から三日間の第二次ロックアウトを強行した。ニセ時間短縮と不屈の闘いと権利闘争(ストライキ)の全面的圧殺をその目的としている以上、この波状ロックアウトは毎月くり返されて、「兵糧攻め」(資金不支給)の狙いをも露骨につらぬくだろう。

いづれかが屈服するまで——まさしくどろ沼的永続闘争に向って、いま、七二年の職場は暮れようとしている。全国の仲間たち。生産点についてよびよせることに成功したこの階級闘争の「紅蓮の炎」を、七三年にはさらに全国の職場でうけついでくれたまえ。

一九七二年十二月

目次

まえがき 一

序章 組合分裂下のある断想 二

僕たちのいた地点／総括をめぐって／あるエピソード／財政のことなど／
一人の若者の決意／職場から再生の闘いへ／勝負は全重工で

第1章 三菱重工の組合を強くする会の闘い 三

I 原口四原則（総評）をのりこえて全重工との総力戦にかちぬけ 三八

II 一九六七年三菱三原闘争 三三

III 長船支部の再建と六八年四、五月闘争 三六

IV 全国総会とその到達点 四〇

V 一九六八年三菱広機闘争 四二

VI 三菱名古屋のたたかい 四六

第2章 七〇年をめざす反戦青年委の闘い 四八

I 六八年闘争 四八

(1) 流血の佐世保闘争から何をまなぶか 四九

(2) 手記 機動隊の靴の下で 一〇五

II 六九年闘争 一三三

(1) 4・28沖繩デー 一二三

(2) 8・10大村闘争報告記 一二四

(3) 出入国管理法案粉碎のために 一二〇

(4) 全国造船反戦結成宣言 一二三

(5) 10・21首都闘争報告 一二五

(6) 10・21三菱重工騒動記 一二七

(7) 11・13職場自主スト闘争 一二〇

(8) 11・16首都闘争報告記 一二三

第3章 六九年10、11月闘争と反戦派労働運動のゆくえ 一七〇

I 『情況』誌の座談会から 一七〇

II 『破防法研究』誌の座談会から 一七三

III 七〇年代の関頭に立って 一七五

IV 真の労働者国際主義の第一歩 一七六

第4章 三君首切り反対闘争と第一組合の死 二六六

I 首切りに加担した長船分会 二六六

II 長船反戦の声明と「守る会」の発足 二七〇

III 七〇年二・一一首切り粉碎闘争の報告と教訓 二七三

IV 社共の首切り正当化論を批判する 二九二

V 裁判の勝利と「守る会」の発展的解散 三二五

第5章 第三組合の結成と新たな闘い 三三

I 結成宣言と組合規約 三三

II あえて自らの組合を 三三

III 死の商人II三菱独占と対決する長船新組合の闘い 三二

IV 現在までの主な闘い 三二

V 最近の組合ピラから 三六

VI 労働者に敵対する造船重機労連の指導路線 三五

(1) 一九六八年『経営と労働』8月号から 三五

(2) 一九七二年『造船界』5月号から 三七

VII 全国造船機械労働者協議会(準)アピール 三二

VIII 全国造船機械労働者協議会(準)結成に際して 三三